『週刊ポスト』2020.10.26(月)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第136回 ラップの先駆者、吉幾三のお気に入りの持ち歌

昭和52年11月、『俺はぜったい！プレスリー』で改名とともにイメージチェンジを図った吉幾三は、笑って泣かせる長台詞入りソング『と・も・子』『ママ』など、レコード会社を変えつつリリースしますが、ヒットは続かず、再び沈黙の時代に入ります。

『俺はぜったい～』から7年後の昭和59年、青森出身の吉幾三が岩手・陸前高田出身の千昌夫に『津軽平野』を提供、その見返りに千昌夫の支援で『俺ら東京さ行ぐだ』をリリースします。『俺はぜったい～』路線の継承でしたが、主旋律以外の「電話も無ェ 瓦斯も無ェ バスは一日一度来る 俺らこんな村いやだ」といった歌詞部分がいっそう語りに近くなり、饒舌な東北弁でコミカルにまくしたてるスタイルが受け、大ヒット。今の若者にとってはまさにラップ音楽の乗りであり、知人が米国から送ってくれたレコードの中のラップ曲をイメージした彼の先進性が発揮されました。

『津軽平野』のヒットで演歌への手ごたえを感じた吉幾三は、千昌夫の反対を押し切って演歌の王道を行く『雪國』を発売、ここから『海峡』『酒よ』『酔歌』『門出』『娘に…』『情炎』など二文字タイトルの演歌を中心にヒットを残しつつ、曲も提供、演歌系シンガーソングライターの確固たる地位を築きます。

吉幾三自身が語る音楽ルーツは、ポール・アンカなどの洋楽やGS、和製フォークなどで、同年齢の私にもわかりやすいのですが、彼の場合、そこに民謡が加味されます。津軽三味線の高橋竹山らと巡業を共にしていた民謡歌手の父親の影響でしょう。

千昌夫同様、地声に近い声で歌われる親しみと安堵感の伝わる歌唱法に加え、どこか望郷や懐旧へと誘われる「既聴感のある幾三メロディー」には、こうした昭和の音楽的背景がありました。

例えば『酒よ』は、発売4年前に大ヒットしたチェッカーズの『星屑のステージ』と類似した旋律ですが、歌声を聴くと、これは吉幾三のルーツである、ポール・アンカ風のロッカバラードと父親譲りの民謡マインドから生まれたように思えます。

そしてヒット曲の大半を作詞し続けてこられたのは、恩師・米山正夫が作曲家でありながら作詞もこなしたのと同様、物語を創作できる才能に恵まれていたことです。吉幾三を歴史に残る歌謡歌手にした最大理由でしょう。

カラオケスナックに行くと、時折、耳にする『と・も・子』という長台詞入りの歌があります。冒頭にも記したように、改名後3作目にあたる吉幾三の初期作品ですが、台詞挿入歌の処女作でもあり、当時ヒットとは無縁でありながら、人情落語のような笑って泣かせる手法を用い、自らの故郷・生い立ち・体験を虚実織り交ぜながら私小説風に仕立てる、彼の原点のような作品になっています。

歌手として世に出られそうもない不安を抱えた苦節時代を忘れないためでもあるのでしょう、デビュー以来47年になる現在でも、コンサートではお気に入りの一曲として熱唱しています。歌手・吉幾三の人生が詰まった熱唱であり、「愛の讃歌」なのだと思います。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私的「昭和大衆歌謡考」』第4集『しあわせになろうね』（グスコー出版）が好評発売中